



と主張すべきではなかったか。日本側は、闘う双方の選手に白を押しつけようとして戦略的に失敗したのである。これもまた、みずからの武道観を他国に投影しようとして自滅した例である〔五〕と松原隆一郎が述べているように、中途半端なこだわりはかえって諸外国の反発を招くだけである。あの時、柔道がこだわったのは「講道館柔道の白」であり、それ以外の柔術諸流の伝統には目が注がれていなかったことを忘れてはならない。確かに講道館は「白い柔道衣」であったかもしれないが、それ以外の柔術諸流においては、黒対白、藍対白といった色違いの柔道衣が幕末のころより使われていたことは、すでに第3章「柔道衣と色」|| 257ページで明らかにしてきたところである。

われわれはよく、「歴史」とか「伝統」とかを口にするが、明治期に成立した近代武道すら十分に検証されていないのが実情である。この日本の地に脈々と受け継がれ、豊富に存在する柔術をはじめとする武術・武道文化の地下水脈（資料）を十分生かしていかないことに問題があるのである。「故きを温ねて新しきを知る」―そのためには、故きを温ねる拠り所が必要である。

日本スポーツの殿堂・国立競技場には「秩父宮記念スポーツ博物館」があり、東京ドーム球場にも「野球体育博物館」がある。それぞれ、国内におけるスポーツの歴史と発展を検証する博物館をもっている。しかし、武道の場合、その殿堂たる日本武道館には博物館が存在しない。あまつさえ、世間では「日本武道館|| コンサート会場」というイメージの方が強く、このままでは日本武道館の存在意義が廃るといえるものである。

たとえ地味で見栄えはしなくても、武術・武道の基礎資料の重要性に注目し、その総合力の上に、

